

愛智におもう——総力戦の時代に  
 〈山村敬氏の書評（本誌32号）に就いて〉

宮 本 久 雄

「初めに言<sup>プロク</sup>があった」（『ヨハネ福音書』1章1節）、「あなたが御父を礼拝する時が来る。この山でも、エルサレムでもない所で。……霊と真理とにおいて。今がその時である。……わたしはある（egō eimi）」（同4章21～26節）。

パリのサン・シュルピス教会で「ヤコブと天使の格闘」（『創世記』32章をテーマにしたドラクロワの作品）の壁画を見ていた時、神の祝福をえようとするヤコブの必死の戦いの中に、愛智の道を歩む者の運命的すがたを思ったのも、もうかれこれ10年も前のことである。現代にあっては戦いは総力戦となる。兵士や市民の別を問わず、そのへばりついた部署の至る所に、あらゆる種類の兵器が、あらゆる方向から思いもかけず飛来して来る。敵の司令部が予め決まっていかなければ中世の戦いの比ではない。この攻撃に対処し索敵をして無気味な敵の本拠に達するため、政治、経済、外交戦は無論のこと、科学技術力、情報、輸送あげくの果ては子供の手をも借りねばならない。専門家だけが前戦で戦うだけでよい時代は終息した。根拠の祝福をえようと今日、愛智の道を歩む者にも奇妙なことも知れないが、事態は同じであるように思える。根拠は専門家としてある分野にへばりついている研究者にあらゆる方向から手を変え品を変え狙い撃ち掃滅しようとしているかに見える。つまり、一定の守備範囲を一定の方法論で守っていれば、やがて戦況が開け根拠に出会えるという従来の方式がゆらぎ始め、覆されようとしてきてしまいか。実際、われわれは一人ひとり、21世紀も近い日本で中世哲学を学び生きている。その日本は、仏教や神道などの宗教的伝統が現代自然科学、技術文明などの波濤に呑み込まれている場である。そこでは中世哲学の基幹をなす聖書学、古代哲学、神学なども不断に方法意識やテーマが変わり、これまでの手法では予想もできなかった問いと方法に徹底的に晒され、根拠の祝福をうるには

根底的な戦略戦術のたて直しを迫られており、さらにその機会さえ過ぎ去りつつあるのかも知れない。これに加えて中世哲学の愛智者は、日本語というその分節が印欧語と異なる筈に乗って、如上の波濤をかいくぐり学的探究を続けている。このような根拠の全面攻勢を受け自らの守備陣地を転覆させられつつもなお彼の祝福に与りたいとすれば、どうしても新たな学と生の態度に依らなければならないのではないか。

筆者も哲学・神学をこの日本や異国で学び、日本人としてキリスト教哲学・神学の研究者及び信仰者の末席を汚し、こうした根拠の仕掛けの全面的攻勢の中で、何か橋頭堡をえたいとあがいている一人に外ならない。そのような混迷の只中であって、様々に対立分化する学と生の多様が、どこで1つの共鳴する力となって根拠の祝福をうるよすがとなるのか尋ねめぐんで来た。そのような秋に、冒頭にかかげた『ヨハネ福音書』の1節「ロゴス」が開示されてきた。それは一切の反対対立多様を調和（ロゴスという言葉自身がこの意味をもつ）する創造的場として漸くすがたを現わしてきたのである。そのことはイエスとサマリアの女の対話において際立っているように思われる。すなわち、われわれが根源的に依って立つ場は、現世的に籍をおいている伝統でもグループでも職場でも文化でも「ここでも、エルサレムでも」なく、今この時「霊と真理において」出会っているロゴスであろうと思われる。そこで筆者は、このロゴスが元始にいかなる哲学や神学にも汚染されないで、根拠が直にわたしを突破してくる『聖書』の研究、殊にその言語身分の特異性に注目してそこから照らしを受けることが、学問的な手続きの第一歩であると考えて来た。そこからギリシア教父、中世哲学の再調査をなしつつ、このロゴスの軌跡を辿ろうとした。その習作・デッサンが拙著『教父と愛智』であった。そこでは『創世記』のダーバールから始め、『イザヤ書』に貫く創造と歴史に躍動するダーバールにふれた。このダーバール・ロゴスがゲッセマネとタボル山の霊性に生きたことは、新約を素直に読み生きてゆけば現成してくる真理である（従ってこれはロースキの東西霊性のシェーマを逆に聖書におしつけて晰出したものではない）。以上の意味で、『教父と愛智』のおかれた場は、『創世記』・『イザヤ書』のダーバール、受肉のロゴス、その歴史的働き、そして歴史を超えてあらゆる人間と伝統との共鳴的収斂点として「今に輝く光」（『ヨハネ福音書』1章5節）たるロゴスであろうと願った（そのロゴスの今日的現在性については、拙稿「仲介する第三者——ヨハネ福音書と pneuma 言語」『翻訳』、哲学の冒険3、岩波書店、1990年を参照されたし）。このようにギリシア教父を、ダーバール・ロゴスから

照射する道と共に、逆にそれを現代哲学の言語分析の手法、人間論、神学、聖書学等に晒し中世哲学、ギリシア教父の宝蔵がどのように今日に暴かれよみがえり、今日の学と生に共鳴するかという試みも当然生じて来よう。その意味で、一方でギリシア教父、中世哲学の着実な歴史的教義的研究と共に、ややもすればキリスト教の既成の方言として固形化する教義と思考タイプを、今日に躍動するロゴスにとかし込み、一新されることを希求する観想が重要であろう。その意味でも、ヘーラクレイトスの探究の道は、『教父と愛智』で簡単にふれたように今日的役割をもつ。まことに、信や祈りの深化は、「ここでもあすでもない」ところの信の根拠への不断の自己無化によって方言的固定化を突破する運動そのものであるから、これは doxologique な否定神学の自己遂行に外ならない。筆者は以上のようにしてやっとロゴスの場に立ちたいと願っており、同じ意味でまだ「三<sup>三</sup>位一体」にどうとり組めるのかに関しては五里霧中の状態にある。ただしその際、ニュッサのグレゴリオスやアウグスティヌス、トマスさらにロースキィやK・ラーナー、モルトマンなどの「三<sup>三</sup>位一体」の研究をすることと、一体そもそも「三一性」が単なる解釈の地平に墮さず、今日どのような言語身分に属し、どのように根拠との出会いの地平を一挙に披くのかを語り出し、どのように今ここでのわたしの生を突破し「われわれ」を創造するのかと問うことは天地の開きがあるということに留意しておく必要がある。学と生において、わたしの問題を放置して「三一論」を論<sup>アゾフ</sup>うことと、わたしの自我の突破をなして根拠がどのように開示されるかと問いゆくことはおよそ次元の違う話しだからである。さて学知にあっては「三<sup>三</sup>位一体論」の深化は、「キリスト論」と「 pneuma 論」の深化と啐啄同時に遂行されるのだと思われる。この点は今詳しくふれる余裕はないが、例えば「 pneuma 論」1つとってみても、今日では東洋の偉大な宗教の体験を視界におかないでは論外なものになろうと思われる。

さらに多少短兵急に語れば、根拠の多角的攻勢に吞まれている今日の状況を自覚し、ロゴスを眼目とすることを手がかりにする時、筆者に最早 the theology などはないように思える。すなわち、トマスにしても、グレゴリオスにしても、ロースキィにしても、one of the theologies であって、そう眺めるとそれらは逆にロゴスの虹のように輝くアスペクトの1つ1つとしてたえようもなく美しく見えてくる。だが、このような場に、ロースキィの *Théologie mystique de l'Eglise d'Orient* を、その三一論やオイコノミア論を共に晒したのが、翻訳でなく「翻案」と批評される結

果を招いたのかも知れない。いずれにしても、ロースキョ翻訳以前その動機をつくって下さったのが、オリヴィエ・クレマン教授であったことは今非常に懐かしく想い出される。教授は周知のようにフランスの教父研究者の第一人者として、また信仰の上でも東方教会の篤信の徒であられる。氏は保守派の攻撃に近年とみにさらされながらも、エキュメニカルな共鳴の場を求めておられ、筆者はそこに自己の伝統の底を極めてゆく途上で生じてくる開放的態度を洞察し感動したのである。それはお互いの相違を無視し、無色透明な中立を虚構する態度では決してなく、いわば2つの立場の奏でる楽曲の交わる音楽に耳傾け、その交わりの音を奏でうる新たな楽器の創造を目指す態度であった。われわれ一人ひとりをそこに招くのは、ロゴスのカリスであろうか。

さて以上から愛智の方法論の性格も特徴づけられるであろう。自然科学の方法論ならば大略、領域次元と手続きと一義的言語を以ってする枠組を決めてゆけば進歩をもたらすことができよう。その方法論が変わる時には、学も変わる。これに対し、愛智の *meta·hodos* とは、その道行きと共に現成する根拠の指標であろう。譬えれば、自然科学は自らを括弧にくくり遠くから山々の連なりに尺度をあて、それらに貫通する道筋を求めるに等しいが、愛智の徒は自ら重畳する山々の道なき道を、刻々と変化する風光に出会いつつ、道を求めるに等しい。始めから何も決まてはいない。それはソクラテスのすがたを想起するだけで明らかであろう。しかもキリストはなお、ケノーシスの途を歩み、道なき道を父との対話のみを根拠として歩んだ（この点にも『教父と意智』において軽くふれた）。だからましてや既成のものとして三一論を固定化した枠組として、智を求めることは決してできないであろう。さて以上の意味で筆者は、ピロソピア（愛智）のソピアに、ソクラテスの求めた不智の智の面影にもまして、ロゴス・ソピア（『智恵の書』9章）たるキリストを洞察するのである。従って愛智の徒の方法とは、今刻々と攻勢の波状を反覆する根拠の無化に従いつつ虚空を踏む思いで、ロゴスの場に立とうと彼を生と学に刻みつけてゆく道行き以外にはないのではないか。このように考えてくると、愛智の徒の現状況は、ギリシアの諸哲学、小アジアの諸宗教、東洋の文化、ヘブライの伝統との出立いに立ち会いつつ、それらを1つの織物に織り込むようにしてロゴスの場において観想し生きた初代教会の教父たちの状況と通底するように思われる。さて紙幅も今や尽きた。根拠は「今日も働いておられる」（『ヨハネ福音書』5章17節）以上、われわれも既成の「安息日」に安住

せず、相異なる楽曲の音を奏でうる 1 つの楽器の創造を乞い求めつつ歩む以外にはあるまい。それが八日目の光（祝福）への道であろう。われわれ 1 人ひとりがヤコブである以上は、

以上の文章は、『中世思想研究』の先号で拙著などを批評された山村敬氏の御言葉や友人、先輩の促しを契機に何か中世哲学へのアプローチや展望について想うことを書き並べたものに過ぎない。むしろ黙々と業績やその作品に語らせておられる先輩の無言の言の前には冗舌にしか過ぎないが、若者の一人の予感をコイノーニアのよすがとしてお受けとり下されば幸甚の極みである。